

2026 年度 入学試験問題

教育学研究科

学校教育専攻（修士課程）

「小論文」

（1 期）

受験番号	氏 名

文教大学大学院

下記の問題について、1,000 字以内で論じなさい。ただし、文章は横書きとし、段落を適宜に設け、常体で書きなさい。

【問題】

以下は心理学者の今井むつみの文章である。筆者の主張をあなたの言葉で簡潔にまとめた上で、本大学院で学ぶ際にあなたが心がけたいことについて、筆者の主張を踏まえながら述べなさい。

探究を自ら経験し、その楽しさを味わい、それが習慣となること。それが探究エピステモロジー*を持つためには絶対に必要である。では、そのためにはどのように子どもを教育したらよいのだろうか。

まず、ことばに要注意である。言語を習得するとき、大人が外国語を学ぶときに「教えてもらわなければわからない」と思っていることを、母国語を学ぶ子どもはすべて自分で発見し、自分の身体の一部にしている。つまり、極論すれば、子どもに発見することの大事さなどを教える必要はないということになる。子どもは生まれながらに、自分で知識を発見するようにできているのだから。では、子どもが探究エピステモロジーを失ってしまうのはなぜだろうか？

ことばがわかるようになると、ことばで「教える」「教えられる」ことができるようになる。人類は言語を持つことで先駆者が築いてきた知識を次世代に受け継ぎ、その知性を進化させてきた。ことばで指示し、教えることは知識を共有するために非常に効率的だ。しかし、その効率性の背後に危うさも潜む。ことばを使って教えられるとき、言っていることの、あるいは書かれていることの、その字面だけを理解してわかった気になってしまうのである。ことばで教えられ、それを「覚える」と、ほんとうは理解していないのに、「覚えたからわかった」と思ってしまう。教えるほうも、質問したときに相手がキーワードを使って答えると「理解した」と思ってしまう。教えるほうも教わるほうもことばで教える、教わるのは効率的なので、それが規範となってしまう、「覚える」ことが知識を得ることだ、たくさん覚えることが最もよいことだというドネルケバブ・エピステモロジー**を持ってしまうのだ。

「たくさん覚えることが大事だ」というドネルケバブ・エピステモロジーを親が持つと、できるだけたくさんの知識を効率よく得ることが子どもにとってもよいことだと考える。すると、子どもがじつくりと好きなように遊んだり考えたりするよりも、ことばで記述された、たくさんの「知識の断片」を覚えることのほうが大事だと思ってしまう。かくして子どもは小さいころから「教えてもらうことを覚える」のに慣れ、それが当たり前だと思ってしまう。生来実践していた「自ら発見する」ことをしなくなってしまうのである。

* エピステモロジーは、知識についての認識である。探究エピステモロジーは、知識は自分で発見するもの、使うことで身体の一部にするもの、システムの一部であること、そしてシステムとともにどんな変化して行くものというエピステモロジーであり、探究を招くエピステモロジーである。

** ドネルケバブ・エピステモロジーは、知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的な事実」として存在し、その断片を人から教えてもらうという知識についての認識である。「客観的な事実」である知識片をぺたぺた表面に貼り付けていきひたすら大きくする様が、肉片を集成してつくる巨大竹輪のようなトルコの伝統的料理のドネルケバブに似ていることから今井が命名したものである。

(今井むつみ(2016):『学びとは何かー<探究人>になるために』、岩波新書より抜粋し、注を付した。)